



平成29年2月27日
佛教大学附属幼稚園

「メジロがおしえてくれた」

園長 藤堂俊英

早春、先咲花といわれる梅が咲きだすと、ツバキの木にあざやかなウグイス色の、目には白いアイリングのメジロがやってきます。しばらく花の蜜を吸い終わるまでそっと見守ります。内田麟太郎さんの詩集『しっぽとおっぱ』のなかに「春分の日」という短い詩があります。

「きょうはねえ」メジロがおしえてくれました 「春を分けあう日だよ」

昭和23年に制定された「国民の祝日に関する法律」では、春分の日について「自然をたたえ、生物をいつくむ」とあります。内田さんの詩をふまえて換言すれば、あたたかい春の光をいのちを頂いたものと一緒に分ちあひ、春の光であたたまった心を通い合えず日、となるでしょうか。

無腐性壊死という骨の難病と闘うかとうみちこさんに「育てるふしぎ」という次のような詩があります。

なにか わすれてしまった
それも いちばん たいせつな なにかを
歩いてきた道を さがしてみたけれど みつからない
もしかしたら かあさんの おなかの中かもしれない
そおと そおと さがしてみた
あ！
育てる ふしぎが 手にふれた

自分の行く手に立ちふさがる逆境に遭遇したとき、私たちはそれまでには気づかなかった何か大切なわすれものがあるのではないかという思いに駆られます。かとうさんのこの詩もそのような中から生まれて来たのではないのでしょうか。

ところで「育」という字は「そだてる」とも「はぐくむ」とも読みます。日本国語大辞典の「はぐくむ」のところを見ると、最初に「羽含(ハクク)むの意。親鳥がひな鳥を羽でおおい包む」という意味があげられています。そして事例として、天平5年に遣唐使の船が難波を出帆したとき、随行員の母親が詠んだ「旅人の宿りせむ野に霜降らば、吾が子羽ぐくめ天の鶴群」(万葉集巻第九)という歌が引用されています。つまり、私の子どもが遠い唐の国に行って宿泊することになるであろう野原に、冷たい霜が降ったならば、天の鶴の群れよ、どうかその翼で包み守っておくれ」というのです。

はぐくむとは、親鳥がひな鳥を寒くなればその羽で包み温める、暑くなればその羽で風を送り冷やす、そうした親心を表わす言葉だったのです。かあさんのおなかの中に満ちているはぐくむ力から生まれた子どもは、母胎の外ではお母さん一人ではない、家族や社会の大きなはぐくみの翼の元で成長を始めます。そのはぐくみの翼の力が弱るならば、子どもの心は冷たさに委縮したり暑さに疲れてしまいます。私たちは一人でも多く子どもたちがその下で共に育つ、はぐくみの翼をいつも忘れないようにしたいものです。